Japanese Association for Religious Studies

にある無限の罪の自覚というものに触れる」ことである。武内はそれを「二種深信」に見いだす。（善導が説く）「至誠心」は親鸞の解釈によって懺悔の言葉となり、「機の深信」（自分が救いようのない罪人であることの自覚）となる。そして、そのままそれが「法の深信」（阿弥陀仏がそのような罪人を救済することを深く信じて疑わない）として阿弥陀仏の救済を信ずるという心と結びつく。

○「将来する浄土」。「われわれが行信とか信仰とかの立場にたつときには、いつも往相・還相という二つの廻向の世界の中に生きている――私自身の表現に従うと――将来する浄土というものの中に生きているのであるが、時間はそこでは未来から現在へと将来してきている。その未来から現在へ将来してきている時間というものの中で、われわれはほんとうに宗教的な人間として、宗教的実存として、初めて自己自身の信仰と自己自身の行為というものを自分自身にもたらすことができる。」

○武内は『教行信証の哲学』にて（「三願転入」に関して）述べる。「自負していたいわゆる第十八願が、自己の深奥に自力の執心を発見すれば、自負していた第十八願は自己を第二十願に貶してしまう。そして一度第二十願に落ちることによってかえって逆に第十八願に浮かび上がる。……第十八願の精神はただ一度第二十願から転入して第十八願となってしまうのではなく、第十八願は絶えず第二十願を自己疎外によって成立せしめつつ、またさらにそれを消滅契機として否定し、第十八願に転入し続けねばならない」。この思索（傍線部）は、武内がヘーゲル『精神現象学』（意識の経験の学、精神の現象を叙述）の思索を手がかりに（親鸞思想）を追思索していることを示している。武内の生涯にわたるさまざまな思索（関心）は、仏教に生きる者（「本願を信じ念仏を申さんとする」念仏者としての宗教的精神）の有り様を追思索せんとするものであったといえよう。

○本願を信じ念仏を申さば（「往生して」仏に成る）を「機の深信」・「下への超越」（の思索）が語り、（本願を信じ念仏を申さば）「往生して」仏に成るを「法の深信」・「将来する浄土」（の思索）が語る。「下への超越」（の思索）は「将来する浄土」（の思索）へとおのずとつながっていく、そのような武内の思索を「信楽の思惟」と特徴づけることができる。

パネルの主旨とまとめ

髙田信良・氣多雅子

本パネルは、龍谷大学ORC「死生観と超越―仏教と諸科学の学際的研究」・unit-2「宗教多元世界における死生観と超越の対話的研究」の研究報告のひとつとしてて企画された。

○（氣多雅子氏からのコメント）従来から扱われるテーマであるが、本パネルの特徴は、現在の我々が「宗教多元的世界」を生きているとの認識のもとに、天理教、キリスト教、イスラーム、仏教における死生観と超越の観念の新しい形を、対話しつつ探究しようとする意図にある。それがどのような点で新しいかということは、次のようにまとめられる。

第一に、超越が人間の卑近な現実の場面から考察されていることが注目される。（澤井）諸井慶徳は、宗教的信を成り立た

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

せている二つの超越の構造の理解を天理教の「出直し」や「陽気ぐらし」という日常生活に直結する教義の捉え直しへと展開している。（高田）武内義範の「下への超越」は、従来の超越の概念を転倒させて、「否定されることで逆に成立する超越」を考えている。ハイデガーは、人間存在の根本的な脱自構造に超越の本来的意味が看取されると考えて、スコラ哲学以来の伝統的な超越概念を大きく変容させたが、諸井と武内の超越理解はその変容と同調するものである。

第二に、超越をこのように考えることにより、宗教が根元的な意味での主体性を可能にするものとして提示されている点である。四戸の示した「ムカッラフ」は特に興味深い。唯一神信仰を自発的意思で選択する者であり、その選択に信仰実践の果実もかかっているというあり方から、信仰と信仰実践が主体性に基づくものであるとともに主体性を可能にするものであるという連関が読み取れる。また、佐原牧師の活動に見られるように、イエスに倣って「悲しみ」の共感を生きるということは、生きることの主体であることを可能にするであろう。「主体性」は、構造主義の登場以降、現代思想の流れのなかでは時代遅れと見なされるが、構造主義が没落させたのはサルトルの実存主義に代表されるような近代的な主体性であり、それが主体性ということのすべてではない。主体性を根こそぎ放棄することは生きているという実感とそれへの責任を手放すことにほかならない。有限性の自覚と結びついた主体性は、近代的主体性とは別の新たな可能性をもっていると考えられる。

第三に、このパネルが意図した「宗教多元世界における宗教間対話」が、従来の対話とは少し違う特徴を示している。四者の発表では必ずしも表立ってはいないが、各人の論考の基礎に、非宗教者たちが対話の重要な相手と見なされていると思われる。従来の宗教間対話は、基本的に、異なる宗教的立場に立つ者同士が他宗教の理解と自宗教の反省をめざして対話するという性格のものであった。しかし宗教多元的世界においては、宗教間の対話が、同時に一般社会の非宗教者に向けた対話であるというようなあり方が必要である。さらに中村は、非宗教者を重要な相手とするということが、宗教間対話だけでなく、牧会活動においても見られることを明らかにした。非宗教者を布教や教化の対象と見なすのではなく、教会という「悲しみと困難の共同体」の構成員と見なすという態度は、宗教多元世界における宗教のあり方を指し示しているように思われる。また、澤井と高田が示した超越の捉え方は、宗教多元世界という現実への応答の形を理論的に示唆している。現代世界における宗教者の信仰と信仰実践が、それぞれの宗教の立ち位置において、世俗社会に対して宗教者の生き方を示すものであることが、四つの発表によって示されたように思う。

○主たる質疑―「超越」に重点がおかれた議論であるが、「死生観」「死と生」は、どのように論じられるのかとの質問を受けた。四人の発表者は、いずれも、死（死に直面する生）を論じようとするところでこそ「超越」が問題となる、との視点から応答がなされた。

NII-Electronic Library Service